

多義語における語義の配列について

——形容詞語彙（性状）をめぐる——

丹 保 健 一

Order of Meanings in the Polysemic word

Kenichi TANBO

要 旨

多義語における語義の配列を考える場合、大別して史的発生順、使用頻度順、意味的関係の三つの視点が挙げられることが多い。本稿は、これまで、真正面から取り上げられることの少なかった語義の配列を多義語における多義間の意味関係から考察し、語義の配列に一定の意味的方向性が見られることを、モノのありさま・性状を表す形容詞を例にとって示したものである。

(キーワード) 多義語、語義配列、形容詞、意味関係、有契性、

(1) 多義語に関する研究は、既に、その存在理由、史的変遷、同音異義語との別、語義の区切り方、語義の配列、多義間の意味関係に関するもの等に関する多くの研究がなされてきている。又、最近では、日本語についても膨大な用例にもとづく個々の語義の詳細な意味記述が行われるようになってきており、又そのような成果を採り入れた辞書もあらわれている。(小泉1989等) しかし、なお多くの未解決な問題が残されていることも事実である。

本稿は、必要とされながら十分に研究が進んでいるとは思われない、語義の配列について、各語義の意味関係から迫ろうとするものである。

このような試みをしようとするのと現代日本語の優れた辞書がつくられていることとは無関係ではない(金田一他編(1974)、金田一、池田編(1978)、西尾、岩淵、水谷編(1979)、山田、築島、白藤、奥田編(1985)、林編(1985))。それらの辞書に見られる多義語の語義の配列、とりわけ第一義の立て方・認定は、我々の言語直観からしても問題になるものがそれほど多いとも思われない。辞書によって多義語の語義配列を見ることは、我々の多義語に対する各語義の捉え方を見ることにも繋がってくる部分が大きいと思われる。

(2) 辞書によって、多義語の語義記述を見ると、多義語の語義配列が一律でないことがある。しかし、第一義について言えば、同型の辞書においては、それほど大きな相違はないようである。

勿論、第一義の立て方が異なるものもある。例えば、『学研国語大辞典』(以下、「学研」と略称する)と『新潮現代国語辞典』(以下、「新潮」と略称する)においては、「こい(濃い)」

の第一義の語義記述は次のように記述されている。用例等は省略する。

「学研」；①その色と白とのちがいが大きい。

「新潮」；①色、味、香、溶液、気体等の濃度、又は毛などの密度が高い。

しかし、「学研」と「新潮」においても、第一義として扱うべき語義として「色にかんする語義」を挙げている点では変わりはない。

第一義に語義的な重複がないもの、つまり第一義の立て方が全く異なるものもある。次のようなものがその例である。

「たかい（高い）」

「学研」；①(ものの位置が) 上の方であって、基準の面（地面・海面・底面など）からのへだたりが大きい。②(ものの) 下端から上端までの長さが大きい。たけが長い。

「新潮」；①上方向への長さが大きい。(鼻などについて) 顔面から前方への突き出しが鋭い。②位置が上方へ大きく隔たっている。

「やすい」

「学研」；①[質・量などのわりに] 値段が低い。②不安や悩みなどがなく、心がおだやかである。また、心身に無理がなく、楽である。

「新潮」；①心にこだわるところがない。こころが穏やかである。平成である。②品質や数量の割に値段が低い。他と比べて値が低い。安価である。

だが、基礎的と思われる形容詞113語⁽¹⁾（国立国語研究所1984の「基礎語彙二千」内の形容詞）を「学研」と「新潮」とによって調査したところ、第一義の立て方が全く異なると考えられるこのような例は上に挙げた2例の外は、「かしこい」の例があるのみであった⁽²⁾。このことは、少なくとも基本的な形容詞の語義記述においては第一義の捉え方にそれほど大きなゆれがない、と考えてよいということになろう。

(3) 辞書の多義記述において語義の配列は、大別して、史的発生順、使用頻度順、意味関係順が考えられる。本稿は、これらの中で最も理想的と言われている語義の意味関係（国広1986）から語義の配列を見ていこうとしている。勿論、語義の配列には、様々な意味の縛られ方（奥田1967）や文体的、位相的差異についても考慮する必要がある。そこで本稿では、語用論的要素や文法的条件を出来るだけ排除する為、又、内省によってチェックすることが出来る事などもあり、対象を現代日本語、それもそのような条件の影響がもっとも少ないと思われる（形状）形容詞を対象とした。そしてさらに、辞書による揺れを配慮して語義の配列は、第一義と第二義以降との関わりで見えていくことにした。

(4) 語義の配列を考える前に多義語の認定、つまり同音異義語との別についての検討、及び、語義の分け方の検討が先立つのではないかという見解もあろう。しかし、そこから始めることはしない。というのは、多義語の認定で問題になるものはそれほど多くはなく、又、語義の区切り方に相違があったとしても第一義とそれ以降の語義の順序性に大きな違いがなければ本稿

の目的を達成するための障害とならないからである。多義の認定については池上1977の基準⁽³⁾を念頭におくにとどめたい。逆に、意味関係を見ていくなかで、多義語の認定基準、語義の区切り方についての何らかの示唆を得ることになるのではないかと期待している。

(5) 語の配列を具体的に扱ったものに奥田1967⁽⁴⁾がある。氏は第一義を、いくつかの意味にとって出発点になるもの、足場になるもの、基本的なもの、として「自由な意味」(現実の対象その物に条件づけられているもの)を挙げ、連語、機能、形態、慣用句の各々に縛られた意味と区別する必要があるとしている。

語義の配列を考える上で、これらの指摘は見逃せないものである。だが、氏自身も奥田1985で「しかし、新しい意味の派生をことなる文法的な条件のなかでの使用にのみみているだけでは、じゅうぶんではない。」と述べているように、意味関係そのものからの分析ではない。

本稿で扱おうとしているのは、奥田氏のいう「もともとの意味と、そこから派生してくる意味とのあいだにある意味的むすびつき」と語義の配列の関係である。

結果的には語用論的、文法論的条件の入り込まない「自由な意味」内での意味的関連についての分析を目指しているということになるだろう。

(6) 多義語の語義項目間の意味関係については、G. Stern や S. Ullmann の、意味変化に見られる意味的関連性の考察の影響を受けたモデルが示されている。国広1986、池上1982、村田1980などがそれである。しかし、これらの分類は、網羅的であり、全体としての統一的な意味的方向性を見ようとしたものではない。

全体的な構造という点からは、国広1986に多義語構造の類型(焦点型移動、枝分かれ方型、階段型、くさび型)が示されているが、これも語義の配列を統一的な有契性という視点から見えていこうする狙いがあるものではない。

(7) このように見てくると、これまで示された語義の意味関係では語義配列の意味関係を分析できないことに気付くであろう。新しい方法が求められていると言えよう。そこで本稿では、辞書に立てられている各語義を、意味的に分類し(どのような分類基準を用いるか重要)、それらの配列の方向性を見ていくという方法をとることにしたい。

(8) 先にも触れたが、有契性(類似性、近接性)についての下位分類は既に村田1980によるものがある。示しておこう。

類似性；①一般化 ②特殊化 ③具体→抽象 ④抽象→具体 ⑤人間の身体部分→無生物の部分 ⑥動物→無生物 ⑦動物→人間 動物の属性→人間の属性・動作 ⑧共感性
近接性；①空間的 ②部分→全体 ③全体→部分 ④抽象→具体 ⑤具体→抽象 ⑥省略 ⑦人→作用 ⑧場所→人(々)空間的

このような分類は、転義の在り方の総てを並べたものとしては意味があろう。しかし、示された各類似性、近接性間の関連性については触れられていない。これらの有契性間の関連性を明らかにするためには少なくとも品詞別に分析する必要があるし、又、語用論的、文法論

的フィルターを通しておく必要もあるものと思われる。

(9) 本稿では、有契性を、とりわけ類似性を重視する立場をとる、と言ったが、より詳しく言えば、それは近接性を契機として出来た語義であれ、類似性を契機としてできた語義であれ、結果として存在する語義の意味関係を、なんらかの統一的な意味的尺度から見ていこうとしている。統一的意味的方向性があるという仮定に立っての考察である。

(10) 幾つかの具体例から見ていくことにしたいが、その前に対象とする語彙についてその範囲を示しておこう。

扱う語彙は、形容詞、それも基本的なものに限定する。具体的に言えば、国立国語研究所1984の「基礎語彙二千」内の形容詞113語である。対象を形容詞に限定したのは、名詞は語義が多岐に渡ることが予想され、又、動詞は文法的な要素が語義に係わることが多く、夾雑物が入り込むことが予想されるからである。試論的要素の大きい本稿の性格を考慮すれば対象は形容詞がもっとも相応しいということになろう。

(11) 語義間の有契性を見ていくためには、語義を分類しておく必要がある。その分類と順序性を発見することが重要になってくる。意味分類として大野、浜西1986を若干修正したものを採用する。この分類を用いるのは、日本語全体を対象とした分類表としては国研の『分類語彙表』があるものの、大野・浜西1986が多義語の語義項目にまで語義を分類したものとしては最も詳しいものであるからである。そしてなによりも、語義分類に一定の意味的方向性を感じとることが出来、語義の配列を見ようとする際に役立ちそうだからである。勿論、あくまでも仮の分類として用いるものである。

(12) 『角川類語新辞典』(以下、「類語」と略称する)の分類・順序、並びに修正を加えた分類・順序を示しておこう。

〔「類語」の分類〕

〔＜性状＞〕

＜位置＞＜形状＞＜数量＞＜実質＞＜刺激＞＜時間＞＜状態＞＜価値＞＜類型＞＜程度＞

〔＜性向＞〕

＜体格＞＜容貌＞＜見振り＞＜態度＞＜対人態度＞＜性格＞＜才能＞＜境遇＞＜心境＞

〔修正を加えた分類・順〕(以下、「新分類」という)

〔＜性状＞〕：物事(人間独自の事柄以外)についていうもの。

〔＜性向＞〕：人間独自の事柄についていうもの。

〔＜性状＞〕の下位分類：

＜位置＞：モノの位置、方向。(例、深い)

＜形状＞：モノゴトの広がり。(例、大きい)

＜実質＞：モノ。(例、重い)

＜刺激＞：刺激を起こさせるモノ、或いは感覚。(例、赤い)

＜状態＞：モノゴトの状況。(例、危ない)

<数量>：数、量。(例、多い)

<時間>：時間。(例、早い)

<程度>：度合、程度。(例、激しい)

<類型>：比較。(例、等しい)

<価値>：価値。(例、良い)

〔<性向>〕の下位分類：

<様態>：身体、容貌、態度、性質、性格。(例、強い、可愛い)

<才能>：才能。(例、賢い)

<境遇>：地位、身分、境遇。(例、貧しい)

<直情>：直接的感情表出。(例、嬉しい)

なお、大野、浜西1986と筆者の分類との間には、同一の意味分類であっても語の所属に若干の出入りが見られるものもある。

(13) 第一義が〔<性状>〕にある語を、第一義の把握(意味)が「新潮」と異なるもの、多義数が2未満のものを除いて、第一義の語義別にまとめると次のように示すことができます。(分類の元になった「学研」の多義記述は〔参考資料〕参照。表中の「?」は分類に自信のないことを示す。)

<位置>

「あさい」 4；①位置、②刺激、③数量、程度、④時間

「ふかい」 8；①位置、②位置、③実質、④実質、⑤程度、⑥類型、⑦様態、⑧様態

<形状>

「うすい」 5；①形状、②実質、③程度、④様態、⑤程度

「おおきい」 7；①形状、②刺激、数量、程度、③形状、④様態、⑤価値、⑥様態、⑦様態

「こまかい」 5；①形状、②実質、③様態、④価値、⑤様態

「せまい」 4；①形状、②形状、③形状、④様態

「ちいさい」 7；①形状、②数量、程度、③刺激、④様態、⑤価値、数量 ⑥価値、⑦価値、
様態

「ひろい」 4；①形状、②形状、③形状、④様態

「まるい」 3；①形状、②形状、③様態

<実質>

「おもい」 3；①実質、②様態、③程度、価値

「かたい」 6；①実質、②様態、③様態、④状態、⑤様態、⑥様態

「かるい」 8；①実質、②様態、③様態、④様態、⑤価値、⑥状態、⑦様態、⑧刺激

<刺激>

「あおい」 5；①刺激、②刺激、③刺激、④様態、⑤才能

「あかい」 4；①刺激、②刺激、③様態、④様態?

「あかるい」 6；①刺激、②様態、③価値?、④状態、⑤刺激、⑥才能

「あたたかい」 4；①刺激、②刺激、③様態、④状態

「あまい」 11 ; ①刺激、②刺激、③様態、④状態、⑤状態、⑥様態、⑦様態、⑧様態、⑨価値、⑩価値、⑪状態

「いたい」 2 ; ①刺激、②様態

「うまい」 3 ; ①刺激、②状態、③才能、

「からい」 4 ; ①刺激、②刺激、③様態、④様態

「くさい」 2 ; ①刺激、②状態

「くらい」 5 ; ①刺激、②刺激、状態、③状態、価値、④様態、⑤才能

「くろい」 6 ; ①刺激、②刺激、③様態、④状態？、価値

「さむい」 2 ; ①刺激、②様態

「しぶい」 4 ; ①刺激、②様態、③様態、④様態

「すずしい」 4 ; ①刺激、②様態、③様態、④様態

「すっぱい」 2 ; ①刺激、②様態

「つめたい」 2 ; ①刺激、②様態

「にかい」 3 ; ①刺激、②様態、③様態

「ぬるい」 2 ; ①刺激、②様態

「まずい」 4 ; ①刺激、②才能、③価値、状態？、④状態？、状態

<状態>

「あぶない」 4 ; ①状態、②状態、③状態、④状態

「きたない」 3 ; ①状態、価値、②価値、状態？、③価値、様態

「くわしい」 2 ; ①状態、②才能

「むずかしい」 5 ; ①状態、②状態、③様態、④様態、⑤様態

「やさしい」 (易) 2 ; ①状態、②状態

<量>

「ない」 3 ; ①数量？、②状態、③状態

<時間>

「はやい」 4 ; ①時間？、②時間、③時間、④時間

<類型>

「ひとしい」 2 ; ①類型、②類型

<程度>

「はげしい」 2 ; ①程度、②程度

<価値>

「いい／よい」 4 ; ①価値、②価値、③価値、④価値

「いけない」 6 ; ①様態、②状態、③様態、④？、⑤？、⑥？、

「よろしい」 3 ; ①価値、②価値、③価値

「わるい」 3 ; ①価値、②価値、③直情？

(14) 語義項目の意味分類の配列を見ると、第一義とそれ以降の語義との間には一定の規則性があるように思われる。つまり、第一義は各々、

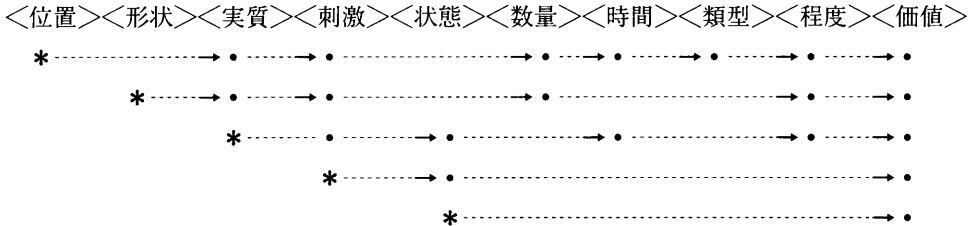
(a) <位置>から<実質><刺激><数量><時間><類型><程度>〔<性向>〕へ、

(b) <形状>から<実質><刺激><数量><程度>〔<性向>〕へ、

- (c) <実質>から<刺激><状態><時間><程度><価値>〔<性向>〕へ、
 (d) <刺激>から<状態><価値>〔<性向>〕へ、
 (e) <状態>から〔<性向>〕へ

といった方向を持ち、その逆はないということである。そのことを図式化すると次のように示すことができよう。＊は第一義の位置を示す。なお、〔<性向>〕への広がりとは省略してある。

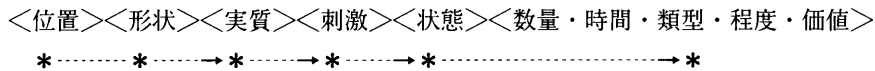
[F, 1]



「たかい」「ひくい」が「新潮」では逆方向になっていることを除けば、「学研」、「新潮」いずれの語義分類であっても、矢印の方向は逆になることはない。（「たかい」「ひくい」については、後に触れる。）

上に挙げた有契性の方向について、さらに抽象化して整理すると次のように示すことが出来るよう。

[F, 2]



(15) 上の図では、<位置>と<形状>の方向性は明確ではない。これは、「学研」と「新潮」の扱いの違いによっている。「学研」、「新潮」では次のように語義を配列している。

「たかい」

「学研」；①(ものの位置が) 上の方であって、基準の面（地面・海面・底面など）からのへだたりが大きい。②(ものの) 下端から上端までの長さが大きい。たけが長い。

「新潮」；①上方向への長さが大きい。（鼻などについて）顔面から前方への突き出しが鋭い。②位置が上方へ大きく隔たっている。

「ひくい」

「学研」；①高さの程度が少ない。②[音響学で] 音の振動数が少ない。[一般の用法で] 声小さく、遠くまで聞こえにくい。

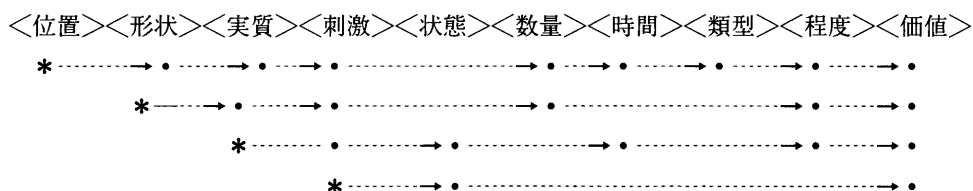
「新潮」；①上方向へ伸びているものの長さが小さい。②基準面から上方への隔たりが少ない。

捉え方に相違が見られる。有契の方向性に対する考え方としては、一つは、「新潮」の第1義を<位置>に含め、その中での順序の問題とする考え方、今一つはいずれかの配列に問題があるとする考え方に分けられよう。後者について結論から言えば、「ひくい」は別として、又、

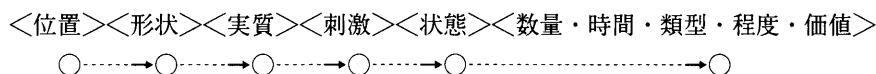
語義の区分は如何に有るべきかに触れなければ、おそらく「学研」の「たかい」の扱いのほう
が抵抗がないのではないかと思われる。そのことは、「新潮」の語義配列であっても「たかい」
「ひくい」を除けば〈形状〉から〈位置〉への広がりがないことから推察されよう。また、
「たかい」「ひくい」の第一義が「形状」であるとしても、それは、単なる長さではなく、上下
といった位置関係を条件とする語義であることから首肯されよう。

このようなことを考慮し、本稿では、第一義、第二義共に語義としては〈位置〉として扱うことにする。このように考えると先に示した有契性の方向と非可逆性は次のように示すことが出来る。

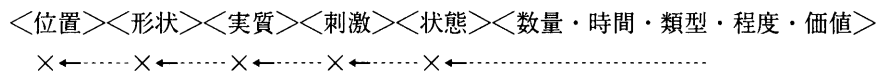
〔第一義から第二義以降への方角〕



〔第一義から第二義以降へ方向〕



〔第二義以降から第一義への非可逆性〕



(16) これまで見てきたように、〔＜性向＞〕に第一義を持つ形容詞（より正確に言えば、国研1984で示された「基礎語彙二千」に含まれる形容詞の内で＜性向＞に第一義を持つ形容詞）の第2義以降の語義の配列に一定の傾向があることが明らかになった⁽⁵⁾。つまり、語義の配列に強い規則性が見られることが明らかになったと思われる。語義配列の内容をも含めて言えば次のように表現できよう。国研1984で示された「基礎語彙二千」に含まれ、〔＜性向＞〕に第一義を持つ形容詞の第二義以降の語義は、＜位置＞＜形状＞＜実質＞＜刺激＞＜状態＞＜数量・時間・類型・程度・価値＞の配列順において第一義の左側に位置しない。

この配列順を語義の面から言えば、「具体」から「抽象」への有契性を持つ⁽⁶⁾、と纏めることができるように思われる。「具体から抽象へ」の内容は「〈位置〉→〈形状〉→〈実質〉→〈刺激〉→〈状態〉→〈数量・時間・類型・程度・価値〉」である。

(17) このように意味的な有契性に強い規則性が見られるのは、第一義を〈性向〉に持つ形容詞の各多義が、位相的・文体的相違が少なく同一のレベルにほぼ収まるものであったからであり、また、連語、機能、形態、慣用句といったものの別がなく、文法的条件が一定だったからであろうと思われる。

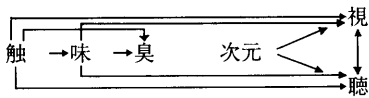
118) これまで述べて来たのは第一義が＜性状＞にあるものであった。第一義が＜性状＞以外、つまり＜性向＞にあるものはこのような傾向は示さない。そのことについては稿を改めて述べることにしたい⁽⁷⁾。

又、有契性の方向性が他の品詞においても見られるのかについては未調査である。今後の課題としたい。動詞等の詳細な語義記述が進んでおり、又、すぐれたシソーラスの研究も見られる現在では、動詞、名詞といった語についての研究も期待出来る。

語用論的レベル、文法論的レベルとの関連を明らかにすることも重要な今後の課題である。又、史的変遷と共時的な語義の広がりとの関わりも興味深いテーマとなろう。

注

- (1) 国立国語研究所1984の「基礎語彙二千」内の形容詞では、「安い」、「易い」を一語として扱っているが、本稿では「学研」に倣って二語として扱うことにする。
- (2) 「かしこい」は「学研」「新潮」では次のように記述されている。
「①頭のはたらきが鋭く、状況に対する反応がすぐれている。②やり方が巧妙である。」(用例等略)
「①(畏い) 恐れ多い。もったいない。②頭がよい。賢明である。利口である。」(用例等略)
- (3) 多義語の認定基準については、池上の「共通の次元か。その次元のすべての可能性を尽くしているか。」(池上1977:194 p) 等がある。
- (4) 奥田はヴェ、ヴェ、ヴィノグラードフの論文を日本語に移したものであるとしている。(奥田1985)
- (5) 本稿の目指している有契性と言う点では、Ullmann 1957(「2 共感現象の汎時的傾向」)にある、共感現象の傾向についての考え方は注目したいものである。史的变化の傾向をも加味した、J. M. Williams の研究を補足したものとして国広1989がある。これは五感を表す形容詞に共感的比喩用法があり、そこには次のような一方的な比喩の方向性が見られると言うものである。



(国広1989; 28 p)

語義の広がり、意味的に一方的な方向性があることを指摘しようとしている点で本稿の議論と共通性がある。史的変遷による比喩の方向性を共時的な視点から見た場合の相違等についても興味深いものがあるが、ここでは本題から外れるので扱わない。

- (6) 「具体から抽象へ」という方向性は、多義数の多い語が具体的な物を表すものに多く抽象的の物を表す語に少ないと言う指摘(野村1980、葛原1984)と無関係ではないと思われる。この点についての考察は稿を改めて述べたい。
- (7) 本稿は、第36回文芸研究会発表大会(1986, 6, 9)において発表したものの一部に焦点を当てたものである。

1989. 10. 20

〔参 考 資 料〕

113の分類の元となった各多義語の語義記述を、「学研」によって示しておきたい。(先に示した113語の内、＜性状＞に第一義があるもののみである。各見出し語の数は「学研」、「新潮」の多義数を示す。丸中数字は第何義かを、又、イ、ロ… a、b、c… は下位分類を示す。なお、例文等は省略してある。)

「学研」「新潮」 多義記述 (『学研国語大辞典』)

あおい、	5、 3、	①青の色をしている。②緑色である。③青に似た感じの色で薄暗い。④[病気のように] 顔に血の気がない。顔色が悪い。[心配や恐怖のあまり血の気を失うようすにも用いる。] ⑤未熟である。
あかい、	4、 3、	①赤(1)の色をしている。②赤みをおびている。明るい茶色である。また、だいたい色である。③健康で血色がよい。[興奮したり、のぼせたり、はずかしがったり、酒に酔ったりしたようすにも用いる] ④[俗] 共産主義者である。共産主義思想をもっている。左翼的である。
あかるい、	6、 6、	①[物がよく見えるように] 十分光を・だして(通して) いるようす。又、光がさしている状態である。②[性格・表情・状態などが] 楽しそうである。ほがらかである。③やましいことや、かくしごとがなく、正しい。④[将来などに] 期待がもてる。⑤[色が] にごりなく、はっきりしている。くすんでいない。⑥ある物事についてよく知っている。くわしい。
あさい、	4、 3、	①くぼんでいいるところの底や奥までの距離が短い。②色がうすい。③物事の程度や分量が少ない。④日数があまりたっていない。特に、春になってから間がない。
あたたかい、	4、 3、	①[物の温度が] 冷たなくて、気持ちがいい。②気温が寒くなくて気持ちがいい。③好意が感じられる。愛情がある。④「ふところがーい」「ふところのーい」の形で、使ってもよい金銭を充分にもっている。
あたらしい、	4、 6、	①[物ができてから、また物事が始まってから] あまり時間がたっていない。②[野菜・魚などがとりたてで] 生き生きしている。③今までにそういうものがなかった。はじめてのものだ。④[今までになく] 現代的・進歩的である。
あつい (暑)、	1、 1、	[不快を覚えるほど] 気温が高い。
あつい (熱)、	4、 2、	①温度が高い状態だ。イ、ロ、ハ、ニ、②[痛みが] 激しい。強い。③感情が激している。④愛情を注いでいる。ほれている。
あぶない、	4、 2、	①[よくないことが起りそう] はらはらするようだ。危険だ。②滅びそうな、またなくなりそうな状態である。③実現しそうもない。成功しそうもない。不安である。④たしかでなく、信用できない。
あまい、	11、 9、	①糖分のもっている味である。②[料理で] 塩気が少ない。③[においが] 糖分を思わせるようだ。④心がとけるようだ。楽しい。⑤人を喜ばせてさそいこむようだ。⑥[男女間の] 愛情が細やかである。⑦[しつけ・採点などが] きびしくない。親切で、なんでもうけいれる。⑧深く考えない。考えがたりない。のんきである。⑨大したものではない。⑩[刃物の] 切れ味が悪い。にぶい。⑪ぴったり合わない。ゆるい。
いけない、	4、 7、	①[性質・品質・状態などが] 好ましくない。よくない。悪い。②望みがない。だめである。③[体質的に] 酒が飲めない。④<「…て(で)ーい」「…するとーい」>などの形である動作が禁止されていることを表す。⑥<「…なければー」>の形で>義務として課せられていることを表す。
いたい、	2、 3、	①体の一部を打たれたり、強く押されたり、きずつけられたりしてたえがたい感じだ。②[弱点をつかれたりして] ひどくこまる。つらく苦しい。
うすい、	5、 10、	①厚さがわずかである。②物の濃度・密度が少ない。③物事の程度が少ない。④[人情・交際などが] 深くない。⑤弱い。足りない。とぼしい。
うまい、	3、 3、	①味がよくたくさん食べたい気持ちになる。おいしい。②好ましい。自分の希望にぴったりあう。つごうがよい。③てぎわがよい。上手だ。

多義語における語義の配列について

うれしい、	2、 1、	①にこにこしたくなる気持ちだ。じぶんの希望するとおりの状態であるので喜んでいる。喜ばしい。②[俗] あいきょうがある。にくめない。かわいい。
おいしい、	1、 1、	[飲食物の] 味がよい。うまい。
おおい、	1、 1、	[数・量・度数などが] たくさんある。
おおきい、	7、 6、	①[かさ・広さ・長さなどが] たくさん場所を占める。②[数・量・程度などが] 多い。はなはだしい。③範囲が広い。④年齢が上である。おとなである。また、すぐれている。⑤重要である。⑥こせつかずゆとりがある。心が広い。⑦おおげさである。
おそい、	4、 4、	①[動きがにぶく] 事を行うのに時間が余分にかかる。のろい。②ある時刻におくれているので役にたたない。まにあわない。③時間的にあとである。④時間がだいぶたっている。特に、(夜が) ふけている。また、(秋が) 終わりに近づいている。
おもい、	3、 7、	①そのものを持ち上げようとするときに、多くの力を要する。ある物を基準にして、それより目方がある。また、そのような感じである。②[気分が] はれられしない。不快だ。③程度がはなはだしい。ひどい。また、重要である。
おもしろい、	4、 4、	①ふつうとちがって笑い出したくなるようすである。こっけいである。②楽しくてつい、夢中になってしまうようすである。③変化があって、たいくつしない。興味をそえられる。④思うとおりで好ましい。
かたい、	6、 8、	①物が、力を加えられても容易に形の変えない性質である。イ、ロ、②動作・顔つきなどにやわらかみがない。こわばっている。イ、ロ、③心の状態が容易に変化しない。イ、ロ、ハ、ニ、④物事が確実である。イ、ロ、⑤[他に対して] 厳格である。きびしい。⑥ふざけたところがない。遊びごとでない。まじめである。
からい、	4、 4、	①[とうがらしをたべたときのような] 舌を強く刺すような味である。②塩み強い。③塩からい。しょっぱい。④[採点・評価などの仕方が] きびしい。厳格である。
かるい、	8、 9、	①重さが少ない。目方が少ない。②動きがにぶくない。動きが軽快である。③[態度・ものの言い方などが] 重々しくない。軽率である。④気持ちが明るくはれられとしている。気分が軽快である。⑤程度がはなはだしくない。ひどくない。たいして重大でない。⑥[処理が] 簡単である。容易である。⑦物事にこだわらず、あっさりしている。⑧[味などが] あっさりしている。淡白である。
かわいい、	2、 2、	①[息子・娘・妻・恋人などに対して] 深く愛する気持ちやたいせつにする気持ちをおこさせる。②小さくて、または、子供っぽくて、ほほえましい気持ちをおこさせる。あいらしい。かわいらしい。
きいろい、	1、 3、	色がきいろである。
きたない、	3、 5、	①どろやほこりなどにまみれて、よごれている。古びたり、染みなどがあったりして不快な感じを与える。不潔である。②正しい形式からはずれて、不快な感じを与える。下品である。③心がいやしい。卑劣である。ひきょうである。
くさい、	2、 2、	①いやな臭いがする。②疑しい。あやしい。いわくがありそうだ。
くらい、	5、 8、	①見た全体が、黒っぽい感じだ。イ、ロ、②[人・物、あるいは人によって表現されたものなどに対する] 印象が明るくない。陰気である。[人・物の性格や、音楽・映画・絵画などの内容についていう] ③物事が・思わしく

(好ましく) ない状態だ。[希望が持てない、公平さを欠く、かくしだてをする、不吉である、などの状態をいう。④[気持ち・表情などが] 沈んで、晴れ晴れしない。おもくるしい。⑤知識が乏しい。事情に通じていない。不案内である。

- | | | |
|-------|--------|--|
| くろい、 | 4、 4、 | ①黒の色である。②黒に近い色をしている。イ、ロ、ハ、③暗くて、輪郭がはっきりしない感じだ。④悪・不正・不吉などの感じがする。 |
| こまかい、 | 5、 4、 | ①いくつか集まって一つにまとまっている物の、一つ一つの形が非常に小さい。②物事の内容がくわしい。詳細だ。③[心づかいなどが] よく行き届く。綿密である。④取るに足らない。些細だ。⑤勘定高い。 |
| さびしい、 | 3、 4、 | ①ほしいものが物が得られず、物足りない。②[人に相手にされなかったり、相手になる人がそこにいなかったり、物事が望ましい状態にならなかったりして] 心が満たされず、楽しい気分になれない。③ひっそりしていたり、数が少なかったり、内容がとぼしかったりして、心細い。にぎやかさがなく、気が滅入るようだ。 |
| さむい、 | 2、 3、 | ①気温が低くて、不快な気持ちになったりからだがちこまったりするくらいに、体温がたくさん奪われるようす。②[ひゆ的に] 寒い①とを感じる場合と似た気持ちを表す。イ、ロ、 |
| しぶい、 | 4、 4、 | ①[十分に熟さない柿を食べた時のように] 舌をしびれさせるようないやな味がする。②[渋味のあるものを食べたときのように] 不愉快そうようすである。③目立たぬ中に落ち着いた深い美しさがある。地味な中に粋な(老巧) などところがある。④金品を出し惜しみするようすである。 |
| しろい、 | 1、 1、 | 白の色である。 |
| すずしい、 | 4、 3、 | ①ほどよくひややかで気持ちがよい。暑くなくて快適だ。②目が心のよさと賢さを表していて美しい。③[姿が] スマートで美しい。④平気である。しゃあしゃあしている。 |
| すっぱい、 | 2、 3、 | ①酸い。酸味のある。②不快である。 |
| せまい、 | 4、 5、 | ①面積が小さい。②幅が小さい。③(活動の) 範囲がかぎられている。また、範囲が小さい。④[気持ちの持ち方や、物の見方・考え方などに] ゆとりがない。 |
| たかい、 | 11、 9、 | ①(ものの位置が) 上の方であって、基準の面(地面・海面・底面など)からのへだたりが大きい。②(ものの) 下端から上端までの長さが大きい。たけが長い。③身分・地位が他より上にある。④能力が他よりすぐれている。⑤品位・品格がりっぱである。⑥一定の水準よりまさっている。⑦程度・勢いなどがはげしい。また、数値が大きい。⑧声・音が耳に大きく聞こえる。⑨よく聞こえている。有名である。⑩買うのに多額の金銭がかかる。量や質にくらべて値段が多い。⑪えらぶっている。[多く「おーい」の形で使う] |
| たのしい、 | 1、 1、 | 心がみちたりて、明るく愉快的な気持ちである。心配やわずらいごとがなく、こころよい。 |
| ちいさい、 | 7、 7、 | ①物の面積・体積が他よりわずかである。②数量や程度が他よりわずかである。③声・音が遠くまで届かない。④(子供の) 年がいつていない。年齢がすくない。年少である。⑤金銭の単位が基準より下である。⑥規模などが他より劣る。大きさが劣り、取り立てて言うほどのこともない。⑦度量などが狭い。 |
| ちかい、 | 4、 7、 | ①[距離・時間の] へだたりが少ない。②抽象的にへだたりが小さい。関係がこい。イ、ロ、ハ、③[性質・形状・内容・状態が] 似ている…と言って |

		もよい。④数量がそれよりやや少ない程度である。それに満たないがそれくらいである。
つめたい、	2、 5、	①[触れた感じで] 温度が特に低い。熱さをはなはだしく奪われる感じだ。②情愛・人情味に欠けている。冷淡である。
つよい、	7、 9、	①力・技がすぐれていて、他に負けない。②健康で、持久力がある。丈夫である。すこやかである。③しっかりとてゆるがない。屈しない。少々のことでは参らない。④ゆるみがない。かたい。⑤[他を圧倒するほど] 勢いが激しい。また数値が大きい。⑥きびしい。⑦<「…に一・い」の形で>イ、…にかけては能力などがすぐれている。…が得手である。ロ、…に耐える力が十分ある。…にあって屈しない。
とおい、	5、 6、	①空間的・時間的にへだたりが大きい。イ、ロ、②抽象的にへだたりが大きい。関係がうすい。イ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、③よく聞こえない。④<目がー・い>老眼である。とおめである。⑤<気がー・くなる>意識を失う。
ない、	3、 7、	①[物・事のように、心をもたないものが] 存在しない。イ、ロ、ハ、②もっていない。③[すでに死んで] この世にいない。
ながい、	2、 3、	①一方のはしから他方のはしまでのへだたりが大きい。②はじまりから終わりまでの、また、ある時点から他の時点までのへだたりが大きい。
にがい、	3、 3、	①[食物などを口に入れたとき] 顔をしかめたくくなるような味を舌に感じる。②不快である。不機嫌である。③[あとで思い出すのもいやなくらいに] つらい。くるしい。
ぬるい、	2、 2、	①[水温などが] なまあたかい。また、ふろなどの湯が適温よりやや低い。②[やり方、処置などが] きびしくない。てぬるい。なまぬるい。
はげしい、	2、 2、	①程度がはなはだしい。度を越えている。②勢いが強く強い。
はやい、	4、 6、	①一定の時間内にたくさん・変化する(動く)ようすである。スピードがある。すみやかだ。②[基準になる時とくらべてそれより] 時刻・時期が前である。③まだその時期ではない。④てっとりばやい。簡単だ。
ひくい、	5、 5、	①高さの程度が少ない。②[音響学で] 音の振動数が少ない。[一般の用法で] 声が小さく、遠くまで聞こえにくい。③身分・地位・品等がいやしい。④能力が劣っている。⑤一般に、程度が小さい。
ひとしい、	2、 2、	①二つ以上のものをある観点から見ればあい、それらの性質・数量・程度などの間に異なるところがない。②その状態が他によく似ている。まるで…のようだ。
ひろい、	4、 5、	①面積が大きい。幅が大きい。②大きくひらけている。③行き届く範囲が大きい。④こせこせせず、ゆったりしている。
ふかい、	5、 8、	①表面と底との間の隔たりが大きい。イ、ロ、②入口を奥との隔たりが大きい。イ、ロ、ハ、ニ、③霧や霞などが濃い。④色が濃い。⑤程度が大きい。⑥夜やある季節になってから時がかなりたち、今まさにたけなわである。
ふとい、	5、 5、	①[棒状・線条・ひも状などの物の] さしわたし・幅が大きい。②[声が] 低くてよく響く。③[中国・四国地方の方言] 大きい。④強い。⑤[俗] 横着である。ふてぶてしい。ずぶとい。(参) 非難の意を含む。
ふるい、	3、 5、	①その・物(事柄)が発生してから長い年月・時間がたっている。新しさ・珍しさなどが無い。②前の時代に属している。昔のことだ。③時代おくれである。陳腐だ。古風だ。
ほそい、	5、 5、	①[長いものを] 途中で切った場合、切り口の面積が小さい。まわりの長さ

		が短い。また、やせている。②幅が狭い。③声が高く小さくて弱々しい。また。④量が少ない。⑤力が弱い。弱々しい。
まずい、	4、3、	①味が悪い。おいしくない。②へただ。つたない。③ぐあいが悪い。④みにくい。
まるい、	3、5、	①円形をしている。球形をしている。②かどがない。曲線になっている。ふっくらとしている。③かどだたず、おだやかだ。円満だ。
みじかい、	3、2、	①端から端までの隔たりが小さい。②初めから終わりまでの時間の経過が小さい。③<気がー・い>しんぼうすることができない。せっかちだ。おこりっぽい。
むずかしい、	5、7、	①わかりにくい。理解しにくい。②複雑で、やっかいである。イ、ロ、③[病気が重く]回復のみこみが(ほとんど)ない。④[人のいうことを]簡単に聞き入れない。苦情・不満が多い。⑤不機嫌で近づきにくい。
やさしい(易)、	2、1、	①たやすい。容易である。②(理屈っぽくなく)わかりやすい。
やすい、	4、3、	①[質・量などのわりに]値段が低い。②不安や悩みなどがなく、心がおだやかである。また、心身に無理がなく、楽である。③軽々しい。おそまつだ。下品だ。④<「おー・ない」の形で>男女の間柄の親密なことをからかっていう語。
よい/いい、	4、5、	①希望するような、また賞賛するような性質をもっているような状態である。イ、a、b、c、d、e、f、g、h、ロ、ハ、a、b、c、d、二、②適している。イ、ロ、ハ、二、③さしつかえない。かまわない。④そうすべきである。そうすることがのぞましい。
よろしい、	3、4、	①「よい」の改まった言い方。イ、ロ、②「よい」をていねいにいう語。③[終止形を感動的に用いて]「よし(感)①②」の改まった言い方。
よわい、	5、7、	①他と争えば負ける。力や勢力が少ない。②[音などが]かすかだ。③不得意だ。苦手だ。④他からの力や刺激に対する抵抗力に乏しい。⑤病気にかかりやすい。病弱だ。
わるい、	3、12、	ある現象が、なんらかの基準からはずれたりなんらかの要求に反したりするときに、その現象を、思わしくない、好ましくない。または望ましくない現象として評価するという語。①[人に及ぼす作用・影響を評価する場合]一般に、不都合である。適当でない。有害である。めいわくである。②[感知し得る物事の状態を評価する場合]イ、[特に人の状態に関する場合。]a、b、c、d、e、f、ロ、[特に物の状態に関する場合。]ハ、[特に自然現象・社会現象などに関する場合。]③[特に、会話文中で、こちらの行為が相手に対してめいわくや不都合な影響を及ぼすことを言う場合]気の毒である。申しわけない。

引用文献及び参考文献一覧

- (1) G. Stern (1931)『意味と意味変化』五島 忠久訳 1962. 7
- (2) S. Ullmann (1957)『意味論』山口秀夫訳 1969. 3 (1964. 4初版)
- (3) S. Ullmann (1962)『言語と意味』池上嘉彦訳 1970. 12 (1967. 6初版)
- (4) 宮島達夫 (1962)『動詞の意味・用法の記述的研究』
- (5) 奥田靖雄 (1967)「語彙的な意味のあり方」(『教育国語』8号)
- (6) 湯川恭敏 (1971)「和歌山方言の若干の形容詞の同一性」(『言語学の基本問題』)
- (7) 西尾寅弥 (1972)『形容詞の意味用法の記述的研究』国立国語研究所、
- (8) 湯川恭敏 (1973)「意味論の所問題」(『アジア・アフリカ言語文化研究』6)

- (9) E. A. Nida (1975) 『意味の構造——成分分析——』 升川、訳 (1977. 4)
- (10) 池上嘉彦 (1975) 「多義語の構造」(『意味論』)
- (11) J. M. Williams (1976) “Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic universals” *Language*, 52, 2.
- (12) 池上嘉彦 (1977) 「意味の体系と分析」(『岩波講座日本語9 語彙と意味』)
- (13) J. Lyons (1977) 『Semantics』 1, 2
- (14) 森田良行 (1977、1980、1984) 『基礎日本語』 1、2、3
- (15) 仁田義雄 (1980) 「用言への多義性への考察」(『語彙論的統語論』)
- (16) 野村雅昭 (1980) 「多義語」「多義性」(『国語学大辞典』)
- (17) 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』 97～142 p (第3章 多義と同音意義)
- (18) 言語研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』
- (19) 西尾寅弥 (1983) 「音象徴語における意味・用法の転化の一類型」(『副用語の研究』 渡辺 実編)
- (20) 葛原伊都子 (1984) 「語の多義性について——動詞『かける』の意味分析——」(『日本語学』 1984, 11)
- (21) 前田富祺 (1984) 「語義変化と意味関係」(『国語語彙史の研究』 五)
- (22) 奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』
- (23) 大谷伊都子 (1986) 「多義動詞の一考察——『だす』『あげる』『たてる』を例として——」(『論集日本語研究 (一)』)
- (24) 近藤仁美 (1986) 「多義の副詞『よく』についての考察」(『国語学研究』 26)
- (25) 国広哲弥 (1986) 「類語研究の問題点——多義語を中心に——」(『日本語学』 1986. 9)
- (26) 荻野孝雄 (1987) 「日本語の意味分類体系」(『計量国語学』 16巻3号)
- (27) 村田 年 (1987) 「単語の意味と辞書の記述」(研究会発表資料)
- (28) 小泉 保編 (1989) 『日本語基本語動詞の用法辞典』
- (29) 国広哲弥 (1989) 「五感を表す語彙——共感覚比喩的体系」(『月刊言語』 1989. 11)
- (30) 村田忠雄 (1989) 「さわることば——ウルマンのデータを中心に」(『月刊言語』 1989. 11)
- (31) 丹保健一 (1986, a) 「多義語の語彙特徴についての小見——副詞を中心に——」(『文芸研究』 第111集)
- (32) 丹保健一 (1986, b) 「辞書間に見られる多義記述の相違について——音象徴語を中心に——」(『国語語彙史の研究』 7)

資料あるいは参考として用いた辞典等

- (1) 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』
- (2) 金田一、他編 (1974) 『新明解国語辞典第二版』
- (3) 金田一、池田、編 (1978) 『学研国語大辞典』
- (4) 西尾、岩淵、水谷、編 (1979) 『岩波国語辞典第三版』
- (5) 大野、浜西 共著 (1981) 『角川類語新辞典』(改訂版『類語国語辞典』 1986)
- (6) 国立国語研究所 (1984) 『日本語教育のための基本語彙調査』
- (7) 山田、築島、白藤、奥田、編 (1985) 『新潮現代国語辞典』
- (8) 林、編 (1985) 『現代国語例解辞典』